

人元花鳥集

卷之八

三浦三郎

1220

獅子文六



昭和二十四年七月 六 日 發行

昭和二十五年七月二十八日 三刷

定價 百八拾圓
地方賣價 百九拾圓

著 者 獅 子 文 六

發行 者 佐 藤 義 夫
東京都新宿區矢來町七十一番地

印刷 者 佐 藤 精 亮
東京都文京區西江戸川町二一

發行 所 株式會社 新 潮 社
東京都新宿區矢來町七十一番地

電話 九段 (33)
一一一三番 一一二番
一一五番 一一四番
振替 東京八〇八番

て ん や わ ん や

亂丁、落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替へいたします。

東京都文京區西江戸川町 二光印刷株式會社印刷

てんやわんや

いやな音

讀者諸君！

私は犬丸順吉と云つて、無産無職、今年二十九になる、つまりぬ男であるが、これから長い物語りを始めるので、名前ぐらゐは覺えてゐて下さい。

謙遜でなく、私は平凡な人間で、才能、勇氣、學問——男性の裝飾となるべきものを、相當、缺いてゐる。従つて、女に騷がれたといふこともない、麻雀も、野球も得意でない。われながら、魅力のない人間だと思ふのだが、その割に人から嫌はれないのは、私が高慢を知らぬからであらう。私は運命にも、人間にも、よく服従する。それが、私の性格であり、また處世の道でもあつた。例へば、私は鬼塚先生に服従することで、半生を送つてきたのである。

鬼塚玄三、舊日政黨代議士、綜合日本社社長——あの人が私のボスである。私は北海道の貧しい商家の生れで、十年前に、中學を卒業すると、東京に出たのだが、ふとした縁で、鬼塚氏に拾はれた。私はあの人を、先生と呼び、お宅の書生を二年勤め、「綜合日本」の記者になつた。ジャーナリストが望みではなかつたけれど、先生の命令だから、それに従つたのである。

そのうちに、戦争になつた。すると、先生は、私に情報局に入れといふ。私はせつかく記者の年季を

入れたのに、残念と思つたけれど、先生の云ひつけだから、文句は云へなかつた。

私は情報局二部二課といふところで、月給七十五圓貰つて、半年ほど雇員を勤めた。そこは出版用紙を割當てる課で、鬼塚先生は私を通じて、うまいことをする計畫だつたらしい。事實、大分うまい汁も吸つたやうである。先生は將棋好きだけあつて、決して無駄な駒を動かすことはない。

ところが、私は肺尖カタルになつて、やがて役所を退かなければならなかつた。今度は、先生は湘南鶴ヶ浦の別荘へいつて、養生をするやうに、私に命じた。

ちよいと聞くと、親切な命令だけれど、先生の別荘には疎開荷物が一ぱい詰つてゐて、掃除番の爺さん一人では、不安な状態だつたのである。私は、事實上、別荘番を命ぜられたわけだが、人の子分となつて、それくらゐのことに驚いてはゐられない。

しかし、鶴ヶ浦へきてから、私の健康はメキメキと恢復し、それに恐ろしい東京の空襲を免れる幸福があつた。私にとつて軍隊生活と空襲ほど、恐怖すべきものはない。私は非常に臆病な點でも、常人に劣つてゐるのである。

さうかうするうちに、この夏に、長い戦争が終つた。やれやれと、胸を撫で下したが、長いことではなかつた。八月十五日から四ヶ月しか経たない今日だが、なんといふ時勢の大變化がきたことであらう。私も考へねばならない。大いに、考へねばならない。さう思つてゐたところへ、早くも、渦巻く運命の潮が寄せてきて、私を一片のワラのやうに、押し流し始めた。約一年間、私は漂流し、すゐぶんバカな目に遇つた。私が述べようとするのは、その漂流奇談なのである。

さて、その晩の話であるが、蟲が知らせたといふのか、私は、いつまでも眠れなかつた。

大體、この廣い別荘に、爺さんと私と二人きりといふのが、よくない。私は、十五疊の客間に臥てゐる。九ツも部屋があるが、この頃は軍人を饗應する必要もなくなつて、鬼塚先生はまつたく足踏みをしないから、私は一番きれいな客間を、占領してゐるのである。ところが、廣い部屋のまん中に、ただ一人寝てゐると、ひどく寒い。寒いだけならいいが、たいへん寂しい。間を置いて、ドーンと、相模灣の浪の音が聞える。海まで七町もあるのに、枕に響くほど、大きな音なのである。

（國破れて自然あり、か）

私もそれくらゐの感慨はある。敗戦といふことは、シーンとするくらゐ、寂しいものだ。降伏直後よりも、この頃の方が、よけいそれを感じる。しかし、國家のことなど、長く考へてはゐられない。

（これア、今に大變なことになるぞ）

今にどころではない。爺さんがこの頃こしらへてくれる食事が、實に大變なものだ。附近の農家が、終戦後、パツクリ物を賣らなくなつたので、今夜などは、乾パンの實のお汁を食はせられた。私も政経雜誌に勤めてゐたので、ちつとは食糧需給の數字も知つてゐるが、このままでいけばどうなるか、あまりにも結果が明らかだ。今年は明治三十八年以來の凶作で、米の實收高三千九百萬石しかない。

（それに、この別荘にも、いつまでゐられるか）

鬼塚先生も時代の變轉で、日陰の人となつた以上、そのうちこも手放すにちがひない。すると、私

は住む家を失ふ。まだ壕舎生活をやつてゐる人の多い東京の焼跡に、私の巢が求められるわけがないではないか。

（いつそ、北海道へ歸るか）

この考へは、私の胸中に、此の間うちから、往來してゐる。歸農といふ語が流行し、故郷ある者は逃げ歸る。消極的な私の心が、それに誘はれずにゐない。

しかし、私は東京に——戦後の新しい生活に未練がないでもない。私は今だつて“綜合日本”に歸ることは自由だし、また他の雜誌社へ就職の道もある。出版界はまつ先きに立直りの兆が見えるのだ。

そして、もつと重大なことは、私はこの敗戦で、一つの天啓を受けたのである。私たちを負かしたアメリカが、自主と自由の國であること——それが私にピンときた。つまり、天が私に、いつまでも鬼塚先生の子分である必要はないと、合圖をしたやうな氣がするのである。

私もまた私の主人の私でありたい。

私もまた基本的人權を確保し、戦後の東京で一働きやつてみたい。歸農などしたら、せつかくの好機會を逸することになるではないか——

そんな風に、不安と希望の間に挿まれて、考へごとをするのだから、容易に眠れるわけがない。そのうちに、事件が起きたのである。

なんのかんのと、考へてゐるうちに、私は、トロトロと、假睡したのではないかと思ふ。いや、確かに

眠つたのである。さもないければ、時間の経過がツジツマの合はないことになる。

ふと、私が気づいた時には、まったく深夜の氣配がしてゐた。ドーン、ザーといふ浪の音が、手にとるやうに、ハッキリ聞える。萬籟死して聲なし、といふ感じである。そして、座敷のなかは、黒漆のやうに暗い。私は、電燈を消さないと、眠れない性分なので、毎晩、寝につく時にスイッチを切るのである。庭に面したこの客間の廊下は、バルリと、明りとりのランマ窓がついてるが、戦時中の防空暗幕が、まだそのままになつてるので、外の光線が射しこむ隙がなく、朝寝坊にはもつてこいの部屋で、私は九時前に寢床を離れたことはない。

私は、何か物音を聞いたのか、尿意のために眼を覺ましたのか、そこはわからない。とにかく、便所へいきたくてたまらなかつた。しかし、まだ十二月の初めながら、非常に寒い晩で、寢床を出るのが、難儀でならない。翌朝までは、斷然持ち越せぬといふ判斷のもとに、やつと、私は起き上つたのであるが、なにぶん、シンの闇といふべき暗さで、なかなかスイッチの所在が知れない。

スイッチは、座敷の入口の壁にとりつけてある。私は盲の手探りで、壁まではたどりついたのだが、いくら撫で廻しても、砂目塗りのザラザラした手觸りばかりで、金具のところへ届かない。こんなことは、不思議といつていい。もう半年も住み慣れた部屋で、たとひ暗闇のなかでも、いつもた易く探りあてるのである。

私はイライラしてきたが、寢巻に浸み入る寒氣が堪へがたく、もう電燈をつけることは諦め、手探りで便所にいくことにきめた。

それには、障子を開けて、中廊下に出ねばならぬが、障子を探りあてるのは容易であつた。ただ、私
があまり急いだので、ドシンと、體が障子に衝突し、その音が思ひがけぬ大ききでシンとした家の中に
響き渡つたのは、不氣味であつた。

それに懲りて、私は極めて靜かに障子を開けた。そして、まづ暗な中廊下へ、まづ足だけを伸ばした。
素足の指が、冷たい板へ觸れたか、觸れないかといふ時であつた。

ガーンと、耳の破れるやうな爆音と、眼を射る朱色の閃光が、廊下の右手から、私を襲つた。

(いけないッ)

とつさに、私は、われ知らず、後に跳び退り、疊にメリ込むほど、體を低くして、母指で耳の穴を塞
ぎ、三本指で臉を掩ひ、バクリと口を開き——もう忘れてしまつた“防空必携”の動作を、一瞬間のう
ちに演じたのは、不思議なことだつた。

空襲ほど私の怖れるものはない。

あれだけは、二度と御免だ。といつて、私の直接経験したのは、十九年末の銀座のそれで、損害も輕
かつたのだが、ただ音を聞いただけで、私は完全に腰を抜かした。そして、當分の間、小便の出が悪くな
つて、困つた。平和になつた時、私が何よりも嬉しかつたのは、もう空襲がないといふことなのである。

その恐怖心が、腹の底に残つてるので、あの晩も、私はあんな醜態を演じたのかも知れない。

私は呼吸を殺して、といふよりも、呼吸もできずに、二回目の爆音を豫期した。全身が氷のやうに冷

え、そのくせ少しも寒くなく、石のやうに固くなつた胸部の奥で心臓が早鐘を打つてゐた。

しかし、いつまで経つても、次の爆音は起らなかつた。あの音を聞く前より、かへつて周囲は靜まりかへつてゐるやうだつた。あまりに、寂寞を極めるので、私は、新式爆彈のために、萬物が死に絶えたのではないかと、考へた。それにしては、私一人が生きてるのが、不思議であつた。私は、確かに生きてゐる。暗闇のなかではあるけれど、私の存在を否定すべき何物もない。私は考へ、感じ、呼吸してゐる。ほのかに便所の臭ひもする。そして、風が變つたのか、少し遠くなつたけれど、相模灣の浪の音も、ハッキリと耳へ入る。

私の生きてゐることが、實證されると、嬉しいには相違ないが、また別な氣分が、私の性格から湧き出した。私は非常に早く信じ、また非常に早く疑ふ性格なのである。私が生きてゐるには相違ないとしても、ことによつたら、夢を見てゐるのではあるまいか。――

爆音も、閃光も、夢の中の出來事であつたかも知れない。戦後の空襲なんてことが、もしあつたとしたら大變なことである。平和國家となつた日本は、ソヨとも物音を立つべきものではない。私は悪夢を見て、寝呆けて、こんなところまで、這ひ出したのではないか。さうだとすれば、掃除番の爺さんにも話されぬ、醜態と云はなければならぬ。

私は、恐る恐る、首を上げて、前方を眺めた。障子を開けたのは、夢ではないとみえて、冷たい空氣がしきりに流れてくる。それが、氷のやうに肌に浸みる。そして、便所に近い、右手の廊下を見ると、雨戸とガラス戸を二重に閉めたはずの暗闇に、爛々と、冬の夜の星が光つてゐるではないか。

（夢ではないぞー）

今度こそ、私は變事を認識した。爆風で、軒が吹き飛ばされたのであるか。しかし、よく見れば、外れてゐるのは、たつた一枚の雨戸で、星明りの庭の棕櫚竹が、そこから黒々と覗いてゐた。爆風は、そんな器用な働きをするものではない。

私は、まったく別な恐怖に捉へられ、無我夢中で、爺さんの名を呼んだ。

「竹造さん！　きてくれ、早く……」

夜が、白々と明ける頃に、私は駐在所に電話をかけた。それまでは、電話のベルを鳴らすのさへ、警戒して、竹爺さんの臥てゐる女中部屋に、縮んでゐたのである。

「この頃は、事件が多くてね。昨夜も、本署へ一人送つて、終列車で歸つてきたわけだね。犯人が逃げた後だつたら、すぐ行つても、しやうがないからね。もう一寝入り、さして下さいよ。」

顔馴染みの石井巡査は、不埒千萬な返事をした。私の電話のかけ方も悪かつたか知れぬが（被害申立てが主観的で）終戦直後に、日本の警察綱紀がひどく弛んだことも、争はれぬのである。ことに石井巡査は、戦時中も、別荘賣買の仲介をしたり、押収ブロックで顔を赤くしたりしてゐた。しかし、悪警官といふほどの人物ではない。

「石井さんだつて、さう急には來ねえはずだよ。どうも、あんたの話が、腑に落ちねえもの。泥棒が入りかけたのは、ほんとだとしても、爆弾なんか使ふわけがねえではねえか。」

竹爺さんは、私の叫び聲で眼を覺ましたといふが、耳の破れる轟音なんか、てんで聞かなかつたといふのである。夢うつつに、何か物音を聞いた氣もするが、臺所の棚から鼠が飯櫃を落した程度のものといふ意見で、むしろ私の臆病を嘲笑する語氣を示した。尤も、平常から、爺さんは私に對する尊敬の主ではない。

朝日が、枝に残つた霜蜜柑を、赤々と染め出す頃に、私は、もう一度、駐在所へ電話をかけてみた。それから、一時間もたつて、やつと、石井巡查が自轉車に乗つて、姿を現はした。

「今日はね、わしは進駐軍の用務で、平塚へ應援にいくんだよ。わしは、英語ができるからね。」

石井巡查は、サーベルのなくなつた腰を、一向寂しさうにもなく、縁側におろした。まだ戦闘帽をかぶり、英字でポリスと書いた腕章をつけてゐるが、英語ができるといふのは、いかなる程度を意味するのであらうか。

「お忙しいところを、ご苦勞でした。電話で、ちよいと申しましたが、時間は、大體、十二時から午前十時の間と思ふですが、私が便所に起きると、突然——まつたく突然に……」

私は、かういふことを、秩序立てて説明するのが下手で、いたづらに印象描寫に拘泥することになるのだが、石井巡查は半分まで聞かずに、

「コソ泥でせう。急に、増加したね、最近。わし等の自轉車まで覗ふからね。しかし、何かブツ放したといふのは、事實ですかね。」

「さ、それが、わしに聞えねえくらゐだから……」

「爺さん、君は黙つてゐ給へ。とにかく、石井さん、現場はそのままにしてありますから、上つて、見てくれませんか。」

私は、先に立つた。海の上の太陽が、縁側一ぱいに射し込み、私の足が暖くなつたとたんに、私はかへつてクシヤミをした。私は昨夜から寝巻一枚でゐる自分に氣づいた。

やつぱり、私の幻覺ではなかつた。何者か、客間の西側の雨戸を外して、土足のまま廊下へ侵入したらしく、點々と、泥の痕があり、そして、その何者かが盜賊であることは、隣りの部屋の疎開荷物のうちから、スーツ・ケース一つ、大風呂敷包み一つが、敷居の外まで運搬されてることで、疑ひの餘地はなかつた。

「ヤッコさん、途中で逃げたのだな。恐らく、被害はないと思ふが、念のため、調べてみて下さい。」

石井巡査の言葉で、竹爺さんがその部屋の荷物も、他の部屋の様子も見て歩いたが、異状はなかつた。「この別荘は、よく空家とまちがへられるんだよ。一昨年も、コソ泥が入りかけたよ。いつだつて、コソ泥だよ。」

爺さんが、事件を過小評價すべく努力するのは、私の臆病を間接に嘲りたいからであつた。

「とにかく、未遂として、報告はしとくけれどもね。」

石井巡査は、もう歸り支度で、それでも、侵入口を形式的に調べにいつたが、

「や、これは、大損害だ。敷居を刃物で削つてあるよ。見なさい、木屑が下に落ちてゐる。この敷居だつ

て、檜だから、バカにできない。大損害、大損害……」

と、大口開いて笑つた。そして、雨戸を外すには幾多の専門的方法があるのに、敷居を削るなどといふのは、最も初心者の手口であると説明し、要するに、この事件が、コソ泥の未遂に過ぎず、多忙な戦後の警察官を煩はす價值に乏しいことを、暗に匂はせた。

私が侮辱を感じたのは、云ふまでもない。

「しかし、盗難はなかつたにせよ、私が生命の危険を感じたのは、事實ですからね。」

「あゝ、爆音のことですかね。それは、明らかに、あなたの想像だよ。あゝいふ時は、針小棒大に感じるものでね。あんたが起きたのに驚いて、賊があのカバンでも投げ出した音を、爆弾と聞きちがへたのではないですか。」

「カバンを落して、火が出ますか。私は、確かに閃光を見たんです。眼がくらむやうな、朱色と、アジサイ色の中間のやうな光りを……」

「何を見たか知らんが、廊下も、天井も、この通り異状なしでね。玩具のカンシャク玉を投げてても、痕跡は残るもんだが……。まア、あなたの聞いた音が、ほんとだとしても、バチンコぐらゐのところではせう。復員歸りが、九四式などを、やたらに持つてゐるからね。」

石井巡査に云はれて、私はハッと、思ひ當つた。なぜ、今まで、ピストルといふことに考へ及ばなかつたか、不思議と云つてよかつた。

さうだ。それにちがひないのだ。泥棒がピストルを持つてゐて、知らずに彼に近づいた私に、發射し

たのだ。それですべてのツジツマが合ふことになる、ただ、ピストルと爆弾をとりちがへたことが、不覺であつただけだ。

なんにしても、キマリがよくないので、石井巡査の歸つた後、私はひとり庭のアヅマヤへ逃れた。

そこから、海が見える。腹の立つほどいい景色で、大島は青磁、初島と伊豆半島は紫錦手、そして夏蜜柑とオレンジの段畠が目を浴み、その下を浪が洗つてゐる。

（何が恥かしい？　こんな、平和な景色は、皆ウソなのだ）

私の腹の底からコミあげてくるものがあつた。

ピストルの音と爆弾をとりちがへたのは、臆病者の粗忽であるが、私の感じた恐怖そのものは、絶對的正確もしくは正當なのだ。原子爆弾も怖い、ピストルもまた怖い。共に私の生命を一瞬にして奪ふ破壊力を持つてゐる。音響や光は相對的なもので、ピストルだつても、眼と耳の近くで發射すれば、やはりピカ・ドンだ。個人的ピカ・ドンだ。アレを恐れ、コレを軽んずる理由はない。私の生命は一個、私の人生は一回きりだ。私の恐怖は、百パーセント正しいのだ。しかも、その恐ろしい兇器が、石井巡査の話では、非常に流布してるといふのだ。十四年式や九四式、將校用私物のモーゼルやブローニングまで、夥しい數が、心身窮迫して自棄になつてゐる人達の手に、握られてるといふのだ。さう云へば、この頃、新聞にピストル強盜の記事が、激増してきたではないか。

安眠してゐる家へ侵入し、ものを呉れとも云はずに、いきなり小型ピカ・ドンを行ふ。そんなことがザ